

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十日 運輸省(特別投承認雜誌)第三二五号
昭和四十八年五月二十日 印刷 昭和四十八年六月一日発行



第三十九卷 第六号

1973
6



六
月
号

—目 次—

表紙『あじさい』松涛達文画

- 念仏を修せん処は予が遺跡なり……………吉 川 哲 雄……(2)
- 公害問題と仏教……………杉 田 暉 道……(4)
- 随想 雪国の住職日記……………川 端 大 祐……(8)
- 選訳集講話⑤ 念仏の一道のみすぐる……………宮 林 昭 彦……(12)
- 法然上人の御遺跡＝二十五箇所巡拝の由来＝……………石 畠 俊 徳……(16)
- 念仏・人と歴史⑤ 勢観房源智……………伊 藤 唯 真……(18)
- 仏様との出会い……………大 沢 春 子……(21)
- 異僧真覚 〈第十六回〉……………柴 田 六五郎……(24)
- 昨日の夢……………畑 野 豊……(28)
- 「道」仰教への道……………高 橋 良 和……(30)
- 浄土宗の国宝 知恩院勢至堂……………佐々木 洋 之……(32)



嘘を言う人は地獄（ニラヤ）に墜ちる。また自分が実際にやっておきながら「わたしはやらない」という人も同じである。両者ともに行為の卑劣な者であり、死後には同じ来世をたどるのだ。——『ダンマパタ』（法句経）第三〇六——

最近、大手商社による米穀類・木材等の生活必需品の投機買いが、大きな社会問題となっている。古来より、ひとはより良き生活を求め、互いに助け合い、慈しみ合って来たはずである。しかし、その道程の中には、好しとして行なった行為が、全く逆の結果を生んだこともあるであろうし、その時折の社会現象と相まって、正しく地獄絵の様相を呈したこともある。そうした中でもひとは生き続けなければならない。

表題の経典句は、ひとの持つ最も卑しい面を端的に物語っている。ひと誰もが、己れのより良き生活を願うことは、当り前のことであるが、だからといって、そのために他人を陥れることは許されなければならない。地獄の様子を述べた経論は数多くあるが、その中叫喚地獄に附属している火虫地獄は、酒に水を割って売った者が墜ちて、四百四病にかかるといわれている。いつの世にも絶えぬ悪徳商人へのいましめと考えられよう。

今日のように細分化された社会にあって、ひとはその存在の、あまりにも小さなことに気づかされるが、その小さな集まりが、大きな社会を形成する要因であることを忘れてはならない。小事を無視しては大事は成し得ないことは、言を待たないであろう。（S・I）



念仏を修せん処は予が遺跡なり

大本山光明寺執事長

吉川 哲雄

先日ある会合に於て（それは浄土宗の檀信徒の、而も総代世話人クラスの席でありましたが）ある一人から「同じ八百年であるのにどうして別々に法要を営むのか？同時にやったらよいのに……」との質問を受け啞然としました。これは開宗八百年と生誕八百年とを混同していたわけで、親鸞上人生誕八百年慶讃の本願寺法要があまりにも華々しかった為に、法然上人の名が浮き彫りにされずに、その陰にかくれてしまったわけであります。誠に驚き入ったと共に、開八・開八と叫びながらも、我々の教化力の弱さに、慚愧の念を深くした次第であります。又法然と親鸞との知

名の度合が、一般人には大きな差のあることをつくづく考えさせられ、明年に迫る開宗八百年を、よほど心して迎えねばならぬことを痛感しました。

とも角我々は昭和四十九年を目標に、それぞれの立場に於て努力し、精進して来た筈です。各本山は勿論、末端寺院に於ても住職、檀信徒一体となり、それぞれ記念慶讃事業を企画し、堂塔の新改築、境内の整備等、その外観を一新した寺院が数多くあります。「信は莊嚴より生ずる」という立場からすれば、それは誠に結構なことといえるでしょう。本山の役職の一端を担っている立場からして、

今迄多くの寺院の落慶法要、開八記念法要の末席を汚し、祝辞を述べさせて頂いたことも数多くありますが、その席でふと念頭に浮ぶことは、この輪奐の美整った伽藍が、今後念仏道場としての機能を、どの程度果してくれるであらうかということであります。式の終りにどこでも一応経過報告がなされ、その費用の莫大であつたこと、又それを提出する為の努力が容易でなかつたこと等が報告されます。それはそれなりに頭の下る思いがいたします。然し静かに考えます時、堂塔、伽藍の整備は開宗八百年を迎えるための助業であつて、真の目的ではないということであります。開八の真の意義はすでにあらゆる時、所に於て多くの人々から述べられているように、宗祖法然上人によつて点火された専修念仏の精神的灯明を、科学万能の現代社会に、いかに輝やかすか、宗祖の立教開宗のご精神を、現代人の指導理念としていかに展開するかにあると思います。この問題についてはそれぞれ専門的な「学」の分野に於て研究研鑽

が積まれていると思いますが、なかなか困難な問題であり、特効薬のように早急に明示されるものでないことは、充分了解されるところであります。然し教化者の立場からすればこれを待つこと久しの感が深いものがあります。教、学、並び立つて初めて初期の目的が達成されることと信じます。

ともあれ我々の自重しなければならぬことは、堂塔伽藍の落成をもつて開八の目的を達成したという錯覚を起さぬことであり、その時点にどっかりと腰を下して惰眠をむさばらぬことでありましょう。少くともそこから僧俗一体となつての念仏の聲が響いてこなければ、浄土宗寺院としての資格がないということとです。

「あとを一廟にしむれば遺法遍からず念仏を修せん処は貴賤を論ぜず海人、漁人がとまやまでも予が遺蹟なるべし。」

このお言葉を我等末徒たる者よくよく心に銘記して開宗八百年の聖歳を迎うべきであると信じます。



公害問題と仏教

杉 田 暉 道

(横浜市立大学助教授)

現在のわれわれの日常生活において、もっとも関心を持っているものといえは、誰しも先ず公害をあげること
に異論はないであろう。筆者は、医学関係の学校に勤務
していて、公害とくに大気汚染の人体におよぼす影響に
ついて、調査研究を行なっているが、卒直にいつて、わ
れわれ国民がもっともとしなければならない、日本
の公害問題はさらに深刻になるのではないかと憂慮して
いる。

ここでは先ず公害について、健康に及ぼす影響を中心
にして述べ、ついでこれに対して仏教徒としてどのよう
にとりくんだらよいかという私見を述べたいと思う。

そもそも公害が一般の国民の間に注目され始めたの

は、ビキニ諸島において原爆の実験が行なわれてからで
ある。この実験によって汚染された大気が何カ月か後に
日本にやってくるということで、大気汚染ということに
注意が払われるようになった。これがきっかけとなって
公害の問題が急速に叫ばれるようになった。公害とは英
語のパブリックニューサンスを訳したものである。した
がつてこの当時は、公害の発生源から出る汚染物によっ
て、どの程度の範囲に被害があった場合を公害というの
かと真面目に論議されたものであった。早い話が、自分
の家の隣りに騒音を出す工場があった。そしてこの騒音
に悩まされる家が数軒あった。これも公害というのかと
いうような例である。現在は、われわれの生活環境を破

壊するすべての因子を公害と称している。そして、今後新しい公害が次々と発生してくる可能性は十分ある。

公害発生の源泉は、資本主義の発達によることは明白である。したがって資本主義の早くから発達した英国においては、公害防止対策も早くから着手していた。その成果がロンドン市中を流れるテムズ河が今日極めてきれいであるという形となって現われているのはなからうか。

日本は公害先進国という有りがたくないうニックネームを各国からいただいている。それほどわが国の公害の現状はひどいといえる。先に日本の国民がビキニの原爆実験を契機として、公害に関心を持つようになったと述べたが、歴史をひもどいてみると、明治以後すでに何回か、公害が大きな社会問題となっている。

第一の時期は、明治初期の資本蓄積の時から日清戦争前後の産業革命までである。足尾鉍毒事件、別子銅山の公害事件、大阪市の煤煙問題がその頃の主な事件である。

第二の時期は、第一次大戦の戦中・戦後である。この時期は重化学工業を中心に独占化がすすみ、同時に都市問題が続出した。また関東大震災の自然災害が重なって

深刻な公害問題をひき起こした。

第三の時期が、第二次世界大戦後の今日の公害で、これはこれまでの公害に比べると、比較にならないほど規模が大きく、根元も深いので「国民的社会病」といっている人もある位である。

国家自体が公害に真剣にとりくむようになったのは、ザル法といわれているが、昭和四二年八月に公害対策基本法が制定されてからである。ここでは公害を、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、振動、地盤沈下、悪臭の七種目とし、影響を受ける範囲を相当範囲にわたると漠然としている。昭和四五年に国家が調査した公害の苦情陳情件数をみると、騒音振動が第一位で三六%、悪臭が二四%で第二位、大気が第三位で二〇%、水質汚濁が一四%で第四位となっている。

国家では、公害を起こす原因物質について環境基準値を設け、これに基いて公害防止の対策をたてている。例えば自動車の排気ガスの主成分の一酸化炭素は、空気中の濃度が〇・〇〇三パーセントが一時間続くと自動車の規制を行なうことになっている。

そこで環境基準値とはどのような値かということである。これは、環境基準値として示されている濃度では、

長い年月汚染物質にさらされても人体の健康に悪影響を与えない、最大の濃度をいうのである。それを決める方法は、現在の医学的な方法である。この医学的な方法は、現今考えられる最善方法である。したがって将来もつとよい方法が発見されれば、環境基準値が代わる可能性は多分にある。その場合、今の基準値は高すぎた、もっと低くすべきであったということがでてくることは当然考えられる。

さて、公害は人体にどのような影響を及ぼすのであろうか。それは汚染物質によってまちまちである。筆者が研究している大気汚染を例にとつて述べる。人体に及ぼす影響には、急性と慢性の影響がある。急性影響は、高濃度の大気汚染いわゆるスモッグの状態の時にみられる。すなわち気管支炎、または、肺が原因で起きた心臓病などが著しく増加する。わが国では、このようなスモッグ発生の事件は幸いにもまだない。慢性影響は、汚染物質が低い濃度でも長年それにばくろされていると呼吸器系のみでなく循環器系にも悪い影響を与え、結局は寿命を縮めることになる。病気の種類としては、風邪や慢性気管支炎の増加が疫学的に証明されている。また肺機能が非汚染地区の住民より悪くなる。さらに喘息患者も

多くなる。慢性の影響は本人が気がつかぬうちに、進行していくので、急性の影響より重要視する必要がある。

最近の大気汚染は、二年前から光化学大気汚染という新しい型のものが発生するようになった。これのもっとも重要な犯人は自動車の排気ガスということになっているが、まだ解明されないものが多い。

ここで、それでは一体空気がどの程度まで清浄になればよいのかという問題が起こる。深山におけるような組成の空気に戻ればもっとも良いが、そのようなことは到底不可能である。これは水質汚濁も同じことがいえる。この場合の基準（現在の環境基準は決して十分でない）をきめるためのもっとも重要なてがかりになるのは、われわれの健康の障害の程度である。そしてこれらの障害の程度の調査は、長い年月にわたつての根拠ある調査を行なわなければ正しい客観的な結論が得られない。これには是非とも一般住民の積極的なたゆまない協力が必要である。

いわゆる四大公害といわれる水俣病、四日市喘息、イタイイタイ病、阿野川流域の有機水銀中毒事件の裁判は、被害者の勝利という形で判決が下されたが、その判決を下す重要なきめてとなったものは、疫学的方法に

よる影響の成績であつた。疫学的な方法とは、汚染地域と非汚染地域の住民の集団について健康調査を行ない、どちらの集団が健康が害されているかということを経験的に検討する方法である。一般に汚染地域の住民は深い関心を持っているので、健康調査の協力は得られ易いが、非汚染地域の住民の協力はなかなか得られないのが普通である。

重大な局面を向かえている公害問題において、強力な力を発揮しつつあるのが、いわゆる住民パワーである。仏教は慈悲の理想をこの社会に実現するのが目的であることは、今更筆者が述べるまでもないことである。それが、非人階級の救済や差別の撤廃、辻斬、殉死の弊習を非難した昔の仏教徒の行動となつてくるのである。これは今日では「支配階級の制圧からの民衆の開放としての社会改非運動」となるのは当然の帰結である。とすれば、公害などの民衆を苦しめる問題に率先してとりくむのが仏教徒の姿勢ではなからうか。

一般の人々は、仏教は慈悲の理想は説くが、それを具体的に、今日の社会においていかに実践すべきかということについては、仏教徒は適切を指示を与えてくれない、という。また、現代における仏教の生かし方という

と、すぐ、労働への感謝とか、物を大切にとか、日常生活に仏教心を、といった道徳性が強調されて、平凡な日常生活のモラルに終つてしまふ。これは仏教でなくとも、儒教倫理で充分であるという。

仏教における生活倫理化とは、よい行ないや、勤労の道徳を説くことだけではない。公衆の利益に生きる倫理、利他的生産のモラル、施し与える分配と平等の道徳、非人間化に対する抵抗の倫理を実践倫理として説き、それを僧が自ら率先実行することである。

マイカーの廃止運動、非汚染地区の住民の健康調査に際しての積極的な協力、大気汚染の状態を知る方法として、一般の人でもできる簡単な方法があるので、それを利用して継続的な測定、近所に川があればその水の汚染状況の測定（簡単な方法がある）道路の十字路に面している寺では、月一回でよいから自動車通過台数を測定するなどは、やる気があれば誰にでも実行できるのである。

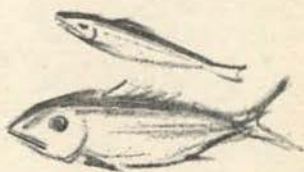
公害問題における住民運動は、いままでの日本人にあまり意識されなかった。人間性または人間の原点、さらに健康というものについての新しい自覚を喚起するようになった。このような運動に加わつてこそ、現代に生きる仏教の道しるべが得られると確信する。

随

想

元

旦



戦時中供出してから、除夜の梵鐘かねを撞くこともないの
で、寺族とのんびり、往く年、来る歳のテレビを楽しみ
ながら、諸行無常を感じるのが近年の習わしとなってい
る。

『今年は本山の鐘を俺おれが撞く』と加行を終った三男坊
が京都から便りをくれた。知恩院に勤めさせたら少しは
坊さんらしくなるかと、親馬鹿まるだしで期待している
親父を喜ばせたいとの孝心からなのであろうか。

寺の跡目の継ぎ手がない時代に、とにかく僧になろう
とする覚悟をきめたのだから、親たる者にて冥すべし、

雪 国 の 住 職 日 記

新潟県小千谷市照専寺住職

川 端 大 祐

となぐさめてくれる人もあるが、田舎寺の住職のけわし
い荆棘の道を将来歩むわが子の不憫をいとおしく思う。
雪はしんと降りしきる、五時の修正会の開白まで
には四、五十センチは積るかも知れない。

久々に帰省した子供等との二年越しの団欒だんらんに、寝正月
をきめ込まれる在家の生活を羨みながら床につく。

.....

七時修正会を終わって雑煮を祝う。

五十年ほど前にはこの寺にも小僧達が四、五人随身し、
中学や、宗門大学に就学しており、お盆や正月はにぎや
かに、楽しかった。戦後は多く寺を捨ててサラリーマン
に転身し、わずかに住職と伴僧と年老いた隠居の老師だ

けが残った。

若い後継者がいないからこのスタッフもいつまで続くか甚だ心細いことである。

なにもかも豊かで便利な世の中となつて、不便で苦しく貧しい寺院の修業の中に飛び込む殊勝な若者は今頃金のわらじをはいてしても探し難いのである。

八十五歳の老師は、四、五年前から毎歳この朝、遺言するようになつた。

『元祖さまの歳まで生かしてもらつたからも早思い残すことはない。どんな病氣にかかっても入院させてくれるな。いのちながらえる注射など打ってもらいたくない。』

よき時代の寺院の生活と修業が老師には楽しく思い出されるのであらう。

而し今年は違ふ、よきスポンサーがついて印度仏蹟巡りに参加することになった。『お釈迦さまの聖地でわしは死んでも悔はない』と張り切つて祝杯を上げ、雑煮を祝つた。

二月十八日　ねはんえ

例年なら今頃二、三回、数十人の人夫を動員して屋根

の除雪に苦勞している時期なのに、本年はまだ一度も屋根の雪下ろしをしない。

朝から子供等の出足繁く、ねはんえ、だんごまきは盛会である。

雪国の冬期間は檀中の法要もなく、寺は冬眠状態に入っているのであるが、住職就任以来始めたねはんえだんごまき行事は、信者の施物も多く、子供等は雪国の楽しみも少いせいか、年々盛大に集り、わが寺のだんごまきは町の人気をよぶようになつた。

老師の滞印一週間、音信なきは無事の証であらう、残す一週間の平安を祈る。

三月彼岸

例年彼岸入りには数名の人夫を雇つて参道の除雪をするのが習わしであるが、本年は屋根下に数米の積雪があるだけとなつた。

墓地も通路に雪がないのに、習慣で墓参者の姿は殆ど見られない。寺参りは少く、寺から檀中に棚経に出かけるのがこの地方の習慣である。

昔は積雪丈余の街路を登下行して棚経して歩いたものであるが今は流雪溝の発達で街は彼岸の声をきけば無雪

となる。しかし棚経地獄は今も昔も変りはない。

住職ともなればアルバイトの若い学僧の様に気楽な棚経と云うわけにはいかない。一軒落しても文句があるのは有難いことながら、責任もまた重い。

布施なき経は読むべからずとはいえ、布施のある読経には僧侶の人間苦が刻まれるものである。一日三、四十軒の巡回は足も痛み、声も哽^かれる苦行である。暑さ寒さも彼岸までと云うが、雪国は往々に彼岸荒れのことがある。春の吹雪になやまされる。

物価は騰貴しても棚経料は二、五百円に固定しているから、「はぐれ念仏」の和尚のように、その多寡に気をもむこともない。

田舎坊主は、その点達観しているのである。

四月一日

今日から一週間、同行五十名で元祖大師の霊場巡りの旅に出る。

半年雪に痛みつけられた北国の人々には、春はまさに生けるしるしを感じさせる季節である。

元祖大師七百五十年御遠忌団参以来十年、毎年、毎年、古刹の団参は布教能力にとほしい住職の唯一の布教

なのである。

新築成った和順会館に初めて投宿する。これがわが浄土宗総本山の宿坊であるかと、檀信徒は誇りと親しみにしばし感激したのであるが、やがて宿泊規定や館内清規^{しんぎ}をいかめしくきめつけられると、田舎の老人たちには、御本山も心休まる憩いの場所とはほど遠いものであった。

四月二日

バスは名神高速道を一路岡山誕生寺に向う。そばの座席で信心深い老人はささやく。『だけど、ご本山も怨がございませぬ。お酒も飲むな、回向料だけで宿銭はいらぬ、他に永代経上げるとも申しませぬし、ちょっと経営が下手でござんすのう……高野山はその点うまいもんです。晩酌一本つけて、日牌月牌回向料をしつこくすすめますが、結局信者は、後でよこびますからね……。でも今朝はようござんした、ご門主さま直々のお朝ちにお参り出来たし、お焼香までさせてもらいました。もう少し回向料お上げしないでしょうか……』

「酒飲むは罪にて候か」「まことには飲むべきにはあらねども、この世のならい」と、しゃれたご答弁をなされた元祖さまの温いお心が通えば和順会館もやがて田舎

の檀信徒たちの心の宿舎となることであらう。
知恩院と永平寺と、高野山と、そして比叡山では夫々
違ったもち味があってよい筈である。

施本 『おぼん』

価一五円

B6変型・表紙共 一二頁
送料実費・二百部以上一三円

◇おぼんはわたくしたちの心に、なつかしい味を思い
おこさせます。

◇とおい昔から、日本に伝えられている行事を通して、
人びとの心のうちなる、仏心を育てましょう。

◇おぼんとおせがきについてのやさしい解説の施本とし
ておすすめます。

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
電話東京(〇三)二六二―五九四四

四月十四日 春季世話人総会

御忌をひかえの春季世話人会。本年は小雪のため水田
のスジ蒔が一週間も早いせい、農村部の欠席が十余人
で約三十人の出席。

寺の維持費の値上げ等については時勢に順^{したが}って異義な
く承認を頂く。

春の御忌法要や、毎月の二十五日講の参会者や当番奉
仕者の問題について難航する。お寺参りは老人だけ、そ
の老人も子守りや留守番でお寺どころではない時代であ
ると云う。

田舎町でも信者を集めるのは並大抵のことではない。

一流のタレント布教師を招待して宗教講演を行うことは
華やかではあるが効果にとぼしい。寺の裏方と料理のこ
と、姑嫁の話、夫のこと子供の話と低い次元の人生論で
も、そこに生きる悩みとよろこびが交錯して宗教への道
が求められるのである。現代の仏教は坊守り仏教に始ま
ると云うのが私の地論である。その点私は家内に頭が上ら
ない。

御忌の運営も家内と婦人会のお蔭である。

選擇集講話

第四章 三輩念仏往生篇

念佛の一道のみずぐる



宮林昭彦

(大正大学助教授)

—

前回では、本願の世界に通ずる道は、ただ念仏の一道のみであることが縷々述べられたのであるが、しかし、ひたすら相統する称名念仏の一道のみが浄土への道であるとしても、仏道はかぎりなく説かれていくところからかして、どの道が近かくして、わたしたちを導き入れる最善の方法か、なかなか迷いがあって決断しかねるのである。

そのとき、法然上人は、わたしたちの迷う心を慮って、浄土往生への数多い道を示されながら、その中で念仏の一道こそ、浄土へ生まれるためのもっとも勝れた道であることを明かにされたのが、こ

の章段である。

わたしたち人間の性格や能力をみた場合、かならずしも一様ではない。いわゆる機根といわれるものは別々で能力的に賢いものも、愚かなものもあり、性格の優しいものも、強いものもあってそれこそ千差万別である。三輩の輩とは「ともがら」で、それぞれの類の意味であって、浄土に生まれたいと念願する種類を三種に分類したところから三輩というのである。この三輩の問題については古来よりいろいろ議論があるが、たてまえとしては、三輩のそれぞれの機類において勝れたものは浄土へ生まれることはたとえ可能であるとしても、もとより本願の行でないから、往生は困難であるといわれる。

しからは、法然上人がなにゆえに解脱しがたい行を説かれている

のであるかというところ、念仏とそれ以外のいわゆる余行とを廃・助・傍の三つの基準で対照して、念仏の一行こそ浄土へ生まれるための最勝唯一の道であることを明かにされようとしたためである。

二

そこで、人間を三種に分類して、上輩、中輩、下輩とするのであるが、選択集四章段では、無量寿經を引用してそれによって説明している。いうまでもなく、この經の一段ではお釈迦さまが阿難に対して、阿彌陀仏の浄土に往生するものもろものがらについて説かれてゐるわけである。

まず、上輩に属すべきものとしてつぎの五つをあげている。すなわち、一に、愛著のふかい貪欲をすてて出家持戒の身となるもの、二に、菩提心をおこし仏になろうと修行するもの、三に、ひたすら無量寿仏のみ名を専念するもの、四に、もろもろの善根功德を修行するもの、五に、浄土に往生したいと願うもの、などである。しかもこれらの衆生が命終ろうとするときには無量寿仏は衆の眼前にあらわれ、すぐにみ仏のあとに随つて浄土に往生し、浄土の七宝の花のなかに自然に化生して、再び惡道に墮ちない不退転の位に置かれるのである。だから衆生が今の世において無量寿仏の來迎を見ようとおもうものは、最上の菩提心をおこして、善根功德を積んで浄土へ往生することをねがうべきであることを示されている。

つぎに、中輩とは、上輩のように、沙門となつておおいに功德善根を積むことはできないにしても、つぎのような七種の修行はなすことのできるものである。すなわち、一に、無上菩提の心をおこすもの、二に、もっぱら無量寿仏を念ずるもの、三に、自分の力量に應じて善根を修行し、八斎戒をまもるもの、四に、寺院仏塔や仏像を建立するもの、五に、出家修行僧に飯食を供養するもの、六に、仏前に燈明や香や花など諸種の供養をするもの、六に、それらの功德をふりむけて浄土に往生したいと念ずるもの、などである。かような修養の行者が命終ろうとするとき、無量寿仏は行者の前にあらわれて、再び惡道に退轉するこのない地位に導かれるのである。それのみならず上輩の人について知恵や福德をも満足せられることを示されているのである。

さらに、下輩について、まごころをもつて浄土に往生したいとねがうものであるが中輩の人のように善根功德を行ずることはできないが、つぎの三種の行をなしうるものであることを説いている。すなわち、一に、仏になりたいと無上の菩提心をおこすもの、二に、ひたすら一生涯お念仏するもの、もしくは臨終に十念を称えることのできるもの、三に、それらのいずれの行をなしても、浄土に往生したいとねがうもの、の三である。

そして、お釈迦さまは、このなか無量寿仏を念ずるものについて、十念ということについて懇切に説明されて、もし念仏の利益広大な甚深の法門を聞いて、すなおに（至誠心）信順して（觀喜信樂不生疑惑）浄土に往生したいとねがい（願生其國）一生涯念仏した

ものをはじめ、最後一度の念仏を称えたものまでも、命終のときには夢中にみ仏をみだてまつて浄土に往生することができ、しかも往生ののちには福德知恵を得ることができる、ことを示されているのである。

三

かように「一向に心を専らにして、無量寿仏を念ずる」ことが、三輩に通ずることになると説かれており、この經文によって、善導大師も、法然上人も、三輩九品に通じて、称名念仏のあることを高調されたのである。

それならば、同じお念仏に、どうして三輩九品の区別があるのだろうか。そのことについて法然上人は、一にお念仏の数の多い少いにより区別が生ずる、二にお念仏の時節の長い短いについて差別がある、三にお念仏をする安心の浅い深いによって区別がある、として解釈しておられる。これは、お念仏にかぎらず、余行でも、おのおの九品に通ずるものであって、それは、一に行の浅深、二に行の多少、三に時の長短によるともされている。しかし、このことは、お念仏は絶対的なものであって、数の多少や、時間の長短によってその価値功德が左右されるものではない。むしろ必須条件である菩提心すらおこすことのできない愚鈍の凡夫が救われる道を明確にされていることを味うべきであらう。

かように、三輩の經文をみてみると、法然上人は、三輩は要する

に念仏往生であると断言されていることに疑問がのこり、また三輩がどうして悉く念仏の一道を目ざしているかをはっきりしておくことが、信仰を進める上に必要であるという点からして、さらに問題をほりさげておられる。

まず、この四章の三輩念仏往生文の標題と、引用している無量寿經とを対称してみるといくたの疑問が生ずる。それは、上輩の文のなかに、念仏の外に捨家棄親などの余行があり、中輩の文にも、起立塔像などの余行があり、また下輩の文にも、菩提心などの余行があるにもかかわらず、標題には、三輩は唯念仏往生を明かにしているのは甚だ理解しがたいというのである。

それに対して、法然上人は、善導大師の指南によって、すなわち観念法門によりこの三輩の意を述べられている。それは、上中下の根性はそれぞれ異っているが、み仏はそれらの機根にしたがって、「皆勸めて専ら無量寿仏の名を念ぜしむ」ことを目的とされておられ、その人等が命終のときには、阿彌陀仏が觀音勢至などの聖衆とともに來迎することを示されたのがそれである。ここで明了のように、三輩はともに念仏往生であると題したと答えられたのである。

四

しからば、善導大師は、なぜこの經文をもって「皆勸めて念仏せしたまえるもの」とみなされたのであろうか。いいかえると、諸行を棄ててただ独り念仏をすめられた經文とみなされた意味が明ら

でないという問題が起ってくる。それは、念仏一行を選択する立場からいうと、当然諸行は捨て去らねばならないが、にもかかわらず経文にはむしろ詳細にわたって、諸行が説かれていることである。もし、諸行が不必要のものであるならば、むしろ説かない方がよいではないかという疑問である。

この問いに対する解答は法然上人の説かれた浄土教において、念仏と諸行との関係をもっとも明らかにすることでもある。

この問題に対して、法然上人は、三点の立場から説明しておられる。すなわち

一には、諸行を廃して念仏に帰せしめんがために諸行を説かれたということ

二には、念仏を助成せんがためにあえて諸行を説かれたということ

三には、念仏と諸行の二門について、おのおの三種の別あることを明かさんがために諸行を説かれたということ

である。第一の廃立の立場において、念仏と諸行との関係が明かにされたのは、善導大師の観經の観方に指南されているのである。

「汝よくこの語を持って、この語を持てとは、無量寿仏のみ名を持つてとなり」

と説かれている一文に、善導大師は凡夫宗教の核心を把握されており、法然上人もこの善導大師の釈義に傾倒して、諸行は要するに念仏に帰一すべきものであるという立場に立たれたのである。およそものを選ぶとき、さまざまのものをならべることによって、取捨す

ることが一層明確されるものであるが、同様に余行を説くことによって念仏一行の選択の確固たる道が明かにされるのである。第二に助正の立場で、念仏と諸行の関係を明かしたのであるが、ここで諸行を説かれたのは、念仏生活を続ける機縁をあたえる役目を果たす意味である。そのことについて、法然上人は、二つの意味を示されている。一は念仏と同じ目的内容をもつ善行によって念仏を助成する方法であり、二には阿弥陀仏への直接関係する念仏とは異なる善行によって念仏を助成する方法である。ここにおいて、浄土教の信者の生活態度をはっきりと示しておられる。第三には傍正の立場で念仏と諸行の関係を明かしておられる。もとよりみ仏の本意は、念仏をすすめんがために、「ただ一向」と示されたのであるが、しかし機縁は種々さまざまであるゆえに念仏と諸行をおこなうものにそれぞれ三種の区別があるとしている。ここにおいても念仏が正しい教であることを明かすために、あえて諸行をならび示されているのである。

かように、廃立、助正、傍正の立場で、念仏と諸行の関係をば法然上人は示されているが、帰するところは、諸行が選捨てられて、念仏の一行に選択され、全生活が、全生命が念仏によって統一されるのが、この章の眼目である。

「本願の念仏にはひとりだちをせさせて、すけをささぬなり。……善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏し、ただうまれつきのままにて念仏する人を、念仏にすけさぬというなり」

法然上人の御遺跡を、一応二十五箇所と撰定し、巡拝を創められたのは、いつの時代からで、誰人によって行われたのでありましようか。実は私もその答を求めて居りました処図らずも、明治四十四年一月発行の『宗教界』（第七卷第一号）に、鷲尾順敬先生が紹介して下さって居るのを見出しました

法然上人の御遺跡

二十五箇所巡拝の由来

石 畠 俊 徳

（大津市石山淨光寺住職）

ので、それに基いて御紹介申上げたいと存じます。明年に開宗八百年を迎え、法然上人の御遺跡の巡拝を勧奨されて居ります折柄、御参考ともなれば望外の喜びです。

今から凡そ二百年程前に、山城（註①）の如来寺の廓誉上

人が、当時西国の三十三所、四国の八十八箇所等の巡拝が流行し、往々にして浄土宗の信徒もこれに参加するのを見て、何んとかして法然上人の御遺跡を明らかにし、自らも巡拝し、且つは祖師の遺跡を巡拝しようと志す人々に、その手引きを与えたいものであると、発願せられましたが、未だこれを果さずして示寂されたのであります。そこでお弟子の靈沢上人が、先師廓誉上人の遺志を継承されまして、首楞嚴經至円通章の二十五円通の經説に依り、しばらく二十五ヶ所の遺跡を撰定し、自ら先達となつて巡拝せんと志され、法縁知己に謀られました処、皆大いに賛成してこれに同行されることになりました。殊に大和長谷（現在・桜井市初瀬町）の崇蓮寺誠譽上人、近江大津（京町）の大専寺讓譽上人、摂津（天王寺区生玉寺町）九応寺の淳譽上人、同摂津（池田市綾羽町）西光寺法譽上人、兵庫（神戸市垂水区星陵台）の長伝寺海譽上人等を主とし、大阪の亀屋浄生、助松屋道喜、兵庫の島屋宗通、因幡鳥取の瑩心等言う信者が助力されることになりました。遂に宝暦二年（1752）、奇しくも法然上人御入滅の建暦二年と干支も同じ壬申の歳、大阪（註②）の極楽橋畔の恋西庵に集合し、ここより出立、巡拝の途に上られました。先づ美作・播磨・摂津等の遺跡より巡拝して行かれましたが、到る処、歓迎せられたのであります。そこで、靈沢上人は、そ

の自らが一行とともに、実地に巡歴したところによりまして、行程及び各遺跡の状況等を、行く先々で記載せられました。それが即ち『円光大師御遺跡二十五箇所案内記』一冊であります。

右の次第で、法然上人の二十五箇所の遺跡を撰定せられましたのは、京都如来寺廓誉上人の遺弟順阿靈沢上人でありまして、法然上人御遺跡の案内記としては、この書物が始めてあります。美作の誕生寺恵聞上人、伊勢松阪の樹敬寺常誉上人、大和の崇蓮寺誠誉上人、摂津の西光寺法誉上人の序跋のありますのは、皆、靈沢上人が実地に巡歴の際、請い得られたもののようであります。

そしてこれが、明和三年（1766）に板行せられました。冊末に、書肆江戸の須原屋茂兵衛、京の秋田屋平左衛門、大阪の本屋又兵衛、大野木市兵衛の名が出ていますが、いづれも当時に聞えた書肆であります。

時、恰も、宝暦十一年（1761）は、法然上人五百五十回の遠忘に相当し、慧成大師と加諡せられ、今まで百年目毎に勤められた遠忘がこの時以後、五十年目毎に行なわれることになるなど、道俗の祖師追慕の念の高揚せる折柄の、この版行は、計らずも法然上人五百五十回忘の記念出版となったもの

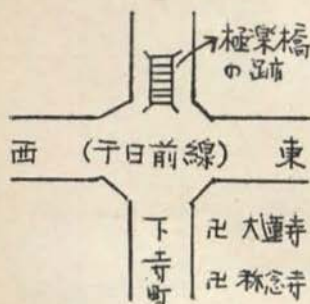
であります。

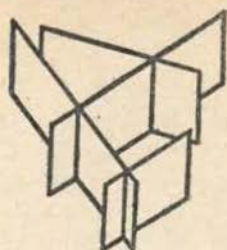
〔註①〕 如来寺の廓誉・靈沢両上人

山城の如来寺（現在・京都市中京区六角通大宮西入因幡町）は放光山善光院と号し、開基は慈覚大師なりと伝えます。中興信譽靈順上人、次が廓誉順起上人、そのお弟子が順阿靈沢上人であります。

〔註②〕 大阪の極楽橋と恋西庵

大阪四天王寺内に御住居の郷土史家牧村史陽先生に、宝暦当時の古地図を調べて頂きました処「恋西庵というのは見あたりませんが、極楽橋の跡は」として、下図の如く御教示下さいましたので附記します。





法然上人をめぐる人びと(五)

念仏人と歴史

— 勢観房源智 —

伊藤 唯真

(仏教大学助教授)

常随給仕首尾十八箇年、上人(法然)憐愍覆護他にこと
にして、浄土の法門を教示し、円頓戒このひと(勢観房)
をもちて附屬とし給う

— 勅伝第四十五 —

浄土宗は変革期に生まれた宗教である。源平の興亡という
激動する時代の波に翻弄される人びとに、念仏という新しい
救いの手をさしのべて、心の安住の世界を与えたのが法然上
人であった。平家を滅ぼした関東武士の面々も、栄華の夢破
れた平家の公達も、ともに法然上人にすがって、念仏の教え
を貪るように聞いた。法然上人の周囲には、対立恩讐をこえ
た静かな世界がひろがっていた。勢観房源智は、源氏の天下

にあって、法然上人の慈愛のふところに懷かれた平家の人で
ある。勢観房はまさしく、時代の変革に没せんとして、法然
上人に救われた人である。

勢観房が生まれたのは寿永二年、平家が西海に走り、木曾
義仲が入京した年である。おこれる人も久しからず唯春の
夜の夢のごとし——と平家物語にあるように、一門の命運は
まさに尽きようとしていた。父は備中守師盛。重盛の孫であ
った。母は一門の西海落ちには従わず、身重であったか、産
みおとしていたかわからないが、ともかく身をかくしてい
た。平家の子孫に対する源氏の探索が始まり、生まれながら

にしてこの児の前途は暗かった。父の名を秘め、世を憚かつて成長したのである。勅伝には「平家逆乱の後、よのはばかりありて、母儀これをかくしもてりけるを云々」と書いてある。

母はこの児が十三歳になったとき、法然上人の許に預け、後事を托した。建久六年、ちょうど法然上人が六十三歳の時であった。専修念仏の教えが弘まり、念仏の声は高まる一方であった。母は、源氏の追求から逃れるためにはなく、もっと純粹に宗教的な感情で、法然上人の憐愍にすがって念仏の教えを受けさせ、わが身も、亡き夫も、亡びさった一門の人びともともに弥陀の攝取不捨の光明に浴させていた。こうとして、愛児を出家させたのである。

法然上人はこの少年を慈鎮和尚の許で剃髪して、すぐに手許にひき取った。慈鎮は九条兼実の弟で天台宗の高僧であるから、源氏の詮索から護るための慈愛の一策ではなかったかと考えられている。ともあれ、法然上人の禪室に帰った少年は、上人の諱の一字をもらって源智と名のり、勢観房と号した。そしてこれより上人がなくなれるまで、常侍給仕の任に当つたのである。上人はこの若き出家をことのほかいつくしました。

この頃法然上人の身边は自行と化他のために多忙であつ

た。勢観房が吉水の庵室に身を寄せたこの年、関東の御家人である津戸三郎為守が教えを受けに訪ねてきたし、また九条兼実の女で後鳥羽中宮の宜秋門院に授戒された。翌建久七年には兼実の父の忠通の忘日の仏事に請ぜられ、翌々八年には兼実にも授戒し、かの『選釈集』の撰述をはじめられている。建久九年には、法然上人は念仏の功つもあり、三昧を發得された。上人は發得の現証を一々記して、生存の間は秘藏しておかれたが、後年ご遺跡を相承した勢観房が、明遍僧都のたつての願いでお見せしたことがあったものの、また秘藏して披露せず、勢観房の死後ようやく世に伝わったという。「三昧發得記」がこれである。人に見せず秘藏しておかれた法然上人のお心を心として、勢観房もまたこれを見せなかったのであつて、勢観房の奥床しい人柄が窺われる。

勢観房は、最も円熟した晩年の法然上人に常隨され、その薫陶を受けられたが、そのことを他人に誇示するような人ではなかった。上人は勢観房に浄土の法門を教示し、円頓戒を伝授された。勢観房は持戒念仏を守った人である。称名に重きを置かれた法然上人が同時に持戒の人であつたように、勢観房もまた戒に関心を持っていた。法然上人の持戒念仏者としてのタイプを受けついで弟子だといえよう。

勢観房は法然上人が心を許されていたなかの一人であつ

た。彼は上人から道具・本尊・房舎・聖教をことごとく相承した。この本尊と思われる阿弥陀仏像が、南禅寺の近くの西福寺にあることが、江戸時代の義山によって発見され、今も現存している。この本尊は鎌倉時代の作で、本尊の袖裏に

上人之御安置仏則某送給

建保乙亥三秋当寺住同四丙子

正月十日ヨリ廿五日迄於当院別

時念仏執行 沙門 勢観源智

と書かれている。このなかに書かれている当院というのは、勢観房がおられた賀茂の功德院のことであって、のち転々として西福寺と伝わったものと考えられている。銘にある建保三、四年は法然上人滅後三、四年に当り、勢観房の年は三十三、四歳である。生前の師と同じように、正月の別時念仏に励まれている勢観房の姿を彷彿とさせるものがある。最終の二十五日は法然上人の忌日である。師と死別して間もない勢観房は、どのように師を慕い、報恩のまことを捧げたであろうか。この銘文からさまざまなことが想像される。

法然上人の終焉の期が近づいた頃、勢観房は永年の教誡の肝要を自筆にしたためて下さるよう懇請した。死の床にある上人が、この愛弟子のために筆をとられたのが、「一枚起請文」であることは言うまでもない。

法然上人入滅の後、勢観房は吉水の地を離れ、賀茂のほとり、佐々木野という所に居住した。住房は功德院である。佐々木野は賀茂および紫野の一部分を含む広い地域を指している。賀茂の功德院といわれ、勢観房の門流を「紫野門徒」とよぶのはこのためである。賀茂の功德院は賀茂神宮堂で、河原屋（瓦屋）と称され、現在の相国寺のあたりにあった。これが後の百万遍知恩寺である。

勢観房がこの地に住む因縁について次のような伝承がある。病床の法然上人を訪ね、浄土の法門のことを聞いて北の方へかき消すように去られた高貴な婦人を、勢観房が「どなたですか」と上人に尋ねたところ、「あれこそ韋提希夫人よ、賀茂の辺におはしますなり」と仰せられたので、法然上人遷化の後社壇近くに居を占められたという。因みにこの韋提希夫人は賀茂の齊主であった後鳥羽天皇の第二女礼子内親王とも、あるいは賀茂の辺の五辻殿におられた後鳥羽天皇の後宮修明門院重子のこととも考えられている。

勢観房は隠遁をこのみ、自身の念仏策励に勤め、法談をしても五、六人も集まれば邪魔が入るからといって中止される程であった。表に立つことを嫌われ、念仏生活のうちにひっそりと生涯を終えられた。暦仁元年十二月、五十六歳であった。



仏様との出会い

大沢 春子

(東京都八王子市在住)

私が初めて、仏様に接したと感じましたのは、丁度仏前での結婚式の時でございました。実際を申しまして、当日は、唯一生懸命で、そのような余裕は無かったように思いますが、後日になりまして、改めて感じたのでございましょうか……。

私は商家の出で、お寺と申しますれば、好きて巡りました京都のお寺が思い浮びます。落柿舎・仁和寺・高山寺・三千院・寂光院・南禅寺など挙げますればきりがございません。お寺に参りました後、何ともすっきりとしたすがすがしい気持ちになれるのが好きでございました。しかし、それも信仰の上からと

言うものでは無く、その雰囲気の中にのみ込まれ、単にそれにひたっていたに過ぎなかったのでもございましょう。つまりお寺と申せば観光の対象としてのみ拝見しておりましてし、信仰という立場から見ますれば、近寄り難い、別世界としか目に映らなかったのでもございます。そんな私が、どういう御縁か、お寺に嫁ぐことになりました。最初不安で大夫夫かしらという心の動揺をおさえますのが大変でしたが、周囲の方々からの温いはげましで、何とかやってみようという勇気が湧いてまいり、何もわからぬまま嫁いだような次第でございます。その時になりまして、実家の

両親の行っておりました、毎朝御仏壇に手を合わせる事お寺参りなど、もっとよく行っておくのだと深く反省させられました。

ゼロからの出発、嫁ぎましてから、両親、主人の助けにより、一年間が過ぎましたが、その間、特に私を直接引っぱって下さった、母の御苦労はヒシヒシと伝ってまいる気が致し感謝に耐えません。はじをお話しすれば、お珠数の正しいかけ方や意味、両手を合わせるわけ、お経の構成や内容など、日常では、衣の事、法事の事そのほか、何から何まで、わかりませんことばかりでございましたし、両手を合わせる事が自然に出来るように成るまでも時間がかかった事を記憶しております。お食事の前に手を合わせ、「いただきます」と申しますが、最初は行わなくてはと、思いながら出来ず、手を合わせる事が大変形式的に思え、何か無意味なように感じられたのでございます。それからしばらくして、拝見しながら、そうではないように思え、まねごとでもしなくてはと思い、心の入らぬまま

ただ手を合わせてみました。行っではいたもののはずかしいような板に付かぬものを感じ、ちょっと手を合わせるか、下の方で合わせるかしていたように思います。他の方との会食などではいたせなかつたのはつきり覚えております。そんな気持が二三ヶ月も続きましてどうか、その間にも「お施餓鬼法要」「お盆」など行事が続ぎ、新しい経験に唯々めずらしく、めんくらしい、ウロウロお手伝いするのみでございましたが、今まで学校の運動会や遠足のような単なる年中行事にすぎないように簡単に考えておりました事が、実は大変意味を持っているのだということ、膚で感じられたような気が致しました。何をどのようにと言う具体的な事は申せませんが、初めて接した事であり、鮮烈に心に響きました事は確かでございます。

いつとは申せませんが、そうしておりますうち、両手を合わせずお食事をいただきますと、何か忘れものをしたような気持を感じ、意識的に手を合わせるようになりました。手

の位置もはずかしくなく、はっきりと胸の前で合わせられるようになったのでございます。今では自然に手が胸の前で合い、感謝の気持で、「いただきます」と申してからお食事をいただけるようになったました。

こうして改めて顧みてみますと、そこに、両親と主人の温い無言の教えがあつたように思います。私が、これはどういう事でしょうかとか、まごまご致しておりました時は別として、無理にこうしなさいとか、あやしなさいとか申された事は一度もございませんでしたが、心に脈々と流れる、仏様に帰依し、日常を送っているものが、無言のうちに伝わり、私を教化して下さったのではないでしょうか。

はずかしいことではございますが、今もって、仏様の教につきましても、行事につきましても、信仰につきましても、ほとんどわからぬまま、日常を送っておりますが、御本堂に参りまして、坐して手を合わせることは好きでございます。莊嚴な雰囲気の内には漂うも

のが、心に伝わり、何かはわかりませんが、今まで経験した事の無いものを感じ、心がひきしまつてまいるのでございます。知っております経文と申しますれば、『南無阿弥陀仏』ばかりでございますが、御本尊様の前に坐して、手を合わせますと、「うそ」も「みえ」も何もかも無く心がしずまるような気が致します。そして御本堂を下る時は、心が清らかになつたような快よい気持を味わう事ができるのでございます。この気持は大切に大切にしたいと思ひます。

これからも、両親や主人に、一つ一つ教えていただき、精神面でも實際面でも多くの、御援助を仰がねばなりませんとぞんじます。これから一生のうち、少しでも仏様に多く接し、知る事ができますれば幸福と存じますし、そうなりたいと思ひます。

私も親となりましたので両親のように、無言のうちに子供達へも、仏様に接する事の幸せを、行いで伝えていければと思ひ、その為にも自分を成長させてまいりたいと存じます。



異僧眞覺

第十六回

柴田六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

一 通り庭の除草を終えた眞覺は、妙春の行方が気になりながら、いやそれだから尚更急いでノミを執った。
(俺が如意輪様を彫れば彼女^あは必ず帰って来る。妙春自身^あがそう言ったではないか) 妙春が速く速くと急^せかせるように感じられた。内陣右脇の一室を仕事場にしたら彼は、襖、障子を閉切り誰も入ることを許さなかった。

刀法は、京に居た頃大竜和尚の使いで何度か訪ねた七条の仏師空慶の工房で飽かず眺めていた、いわば見よう見真似の彫り物であったが、一月も経つと略々輪郭が出来上った。等身の観音像である。右手に裙をつまみ、左手はゆるく曲げて拇指と人差指は何かを持とうとしている。ノミの痕が細くなるにつれてそれは妙春に似て来

た。幾十枚と写し、描いた彼女の姿は脳裏に焼きついて
いるし、それよりも、あの夜眠かくしして撫でた彼の掌
が、妙春の隅々まで記憶していた。それを想い起すと脉
が熱くなって油汗が全身ににじみ出した。その上梅雨の
湿っぽい微臭い匂いと、楠の木の香りが混って、異様な
匂いが部屋にこもったが彼は部屋を開けようとはしな
かった。

植付けの済んだ田は未だ草取りに忙しかったが、それ
でも誰彼と檀家や近所の者が訪ねて来た。ゆっくり上り
込んで雑談する彼等に眞覺は焦立ち、露骨に厭な顔をし
た。仕事の渋滞もさることながら、彼は取りとめも無い
茶話に時を過すことが苦痛であった。

「和尚さんは暇な筈やが、何か他に仕事でもしてなさるか？」

チラと閉め切った部屋の方を伺い乍ら怪訝な顔をする相手に、

「いや。うんまあ、何でもない」

と頗る暖昧な返事で言葉をにごした。七月二十二日は彼の生れた日である。それ迄にと心血をそそいだ観音像はその日の夜中までかかって漸く出来上った。

「出来たぞ、出来たぞ。やつと出来た」

表情の少ない彼には珍しく顔中を綻ばせて躍り上った。立ったり坐ったり、表に廻ったり裏から眺めたりした。我々はその出来栄を嘆賞せずには居れなかった。

「此の掌だ。此の掌が覚えていたのだ」

彼は改めて観音像にその掌を触れた。

「真覚さん。やつと出来ましたね。でも今の私にはやっぱり生れたままの姿の方が似つかわしいのです。天衣も裾も脱がせて欲しいのです」

妙春の声がささやいた。

「うんそうだな……そうしよう」

返事をしてからハツとした。辺りを見廻したが姿は無い。

「妙春！おい妙春、何処に居るのだ？」

呼んでみたが、有るものはただローソクの灯にゆらめく観音像と彼自身の影だけである。

（気のせいかな？確かに妙春あの声だった。いや。俺は大分疲れているのだ。それに妙春の言いのこして行つた言葉を想い出していたからな。やつぱり気のせいだ。しかし考えてみれば俺のような無信仰の破戒坊主が観音様を彫ること自体が間違っているのかも知れぬ。そうだ間違っているのだ。俺は観音像に名を借りて、ただ女の、いや、妙春の裸像が彫りたいだけなのだ。その氣持が妙春の声となって聴こえたのだ）

彼は再びノミをとり上げた。先づ宝冠を彫り剥がすと形のよい妙春の頭が現れた。夜を徹して、天衣を除き、裾を外して終いに翌る日の夕暮小刻には観音は見事に妙春として生れ変つた。真覚は妙春の眉を描き、眼青を入れ、唇に朱をさした。赤い唇は物言いたげに見えた。ぶっ続けの仕事にぐつたりとなつた真覚に昧をすり寄せた妙春は、

「真覚さん、やつと一緒になれました。今日迄私はどんなに待ち遠しかったことが。でもやつと二人切りになりました。もう誰も私達を邪魔することは出来ません。さ

あ抱いて下さい」

と、彼の耳朶に熱い呼吸使いで囁いた。

「ああ、妙春、何時来たのだ？」

「来たのではありません。帰って来たのです。いつかお約束した通り」

「よく判ったな、俺が彫り上げたことが」

「ええそれは」

「それでは……天衣も裾も外してくれと言ったのはやっぱりお前か？」

「ええ。私が言ったのです」

「それを聞いて俺はお前を探した、だが何処にも居なかったぞ、どこぞに隠れていたのか？」

「ええ。でも、もう隠れません。何時迄も御一緒に居ります。さあ！」

と更に肘を押しつけ、からみついて来る姿を彼は激しく抱いた。抱き乍ら、

（妙春とは何時か斯うなるのではないか、いや、斯うなるに違いない）

と、心の底で思い続けていた自分であることを、今はつきりと知った。白衣をかなぐり捨てた真覚と妙春が生れながらの男と女の性に帰って恣に相手を求め合った一

夜が明けると妙春の姿はどこにも無く、彼の背後に妙春の像が艶然と笑みを含んで立っているだけである。（俺の妄想だな。が妙春は一体何処へ行ったのだろう？）現実には還って生身の妙春を想う彼であった。が、来る夜も来る夜も彼は妄想の世界で妙春と同衾した。そしてそれは妄想と云うには余りにも現実的な感覚のもとで行われた。

彼に逢う檀家の人々は言い合せたように尋いた。

「和尚さん此の頃顔色が冴えんようだな」

「何ぞえらい心配でもあるのか？」

「和尚さんえろう疲れた様子じゃな」

そして蔭では口々に、

「どうも妙じゃ。此の頃目に見えて衰えて来なさったようじゃ」

「いや、あれは只事じやないぞ。何ぞ狐か狸でもついてゐるのと違うか？」

「そういえば、眼付がとんとおかしくなった」

「毎晩夜中に誰かと話しておるそうじゃ」

「当り前よ。男盛りじゃ。何処かの後家が娘っ子が通うて来るうじゃ」

「阿呆言え、俺の家は門前じゃ。誰が来うとすぐ知れる

わい」

等々勝手な噂でさわがしかった。

一ヶ月余りも奇妙な歓楽を続けた或る夜、彼は、かねてからの疑問を漸く切り出した。

「妙春。お前は此処を出て行つてから大蓮寺へも帰らず一体どうしたのだ。今何処に居るのだ？」

「ほほほ。真覚さん、貴方を寝呆けているの。私はチャンと此処に斯うしているではありませんか。まあ可笑しな人。それよりも……」

妙春のぬめらかな肌の感触が又々彼を夢中にさせて了った。

（若しかしたら妙春はもう死んでいるのかも知れぬ。死んでその魂が俺に執りついているのだ。ああ俺はもう駄目だ。気が狂いそうだ。気が狂うか、執り殺されるかどっちかだ。何とかせねば）

お願い

先月号の開宗八百年記念特集号、いかがだったでしょうか。本誌では今後も種々慶讃記念の特集を企画中ですが、更に内容を充実させるために、会員各位の開宗八百年に関するご意見、ご希望等、お寄せ下さいますようお願いいたします。

げっそり落ち込んだ眼窩を押えて彼は考え込んだ。覚めれば只管に反省し自戒しつつ、その裏から妙春の幻の魅を恋うる彼は、到頭或る夕方鉦を振り上げた。

「此の像がいかなのだ。これさえ叩き割れば……」

だがその鉦は力なく降ろされた。

「出来ぬ。俺には出来ぬ。若しかしたら俺は既に妙春を殺しているかも知れぬのだ。その上にこれを。例え俺の作ったものにしろ。それに、妙春の魂が乗り移っているかも知れぬ此の像を叩き割ることは何としても出来ぬ」

生身の妙春に対するような気持も加わって、彼は控えた。だが此の妙春の像も、彼自身をも、何とか処置せねばならぬと云う焦りには変りはなかった。

秋の彼岸の勤行をつとめたその夜、彼は有り合せの布で妙春の像を包んで肩にすると、寺を抜け出した。再び帰るかどうか判らぬ善住寺であった。人通りの絶えた街道を西へ急いだ。唐橋にも人影は無かった。あの日の夕陽の光芒の中に妙春と並んで映った影の辺りの水面上、彼はその像を投げた。

「妙春よ、もうこれ以上俺を悩ましてくれ」

「パシヤン」と云う鈍い水音を、そろそろ肌寒くなった川風が浚って行った。



昨日の夢

畑野豊

(神奈川県大和市在住)

いつの頃であったか、まだ小さい時、ぼくたちは幾人か集まって、トンネルの向うへ行ってみようと決意をした。ぼくたちの町は四方を山に囲まれた小さな盆にあり、その西の端の隧道には古いトンネルがあるというところを、子供たちはいつの間にか知っていた。それで、その日は、学校が終わると連れだって、盆地の東南にある町の駅から、西の方へ伸びる電車に乗って隣の町の駅へと向ったのだ。電車の窓からは菜の花の畑が一面に広がっていた。うららかな春の日の午後で、北の方、この盆地の屋根のようにそびえるひときわ大きな山々を、のどかな日差しがあなたかく包んでいた。

子供たち同志で電車に乗ったのは、恐らくこれからはじめてであったろう。電車に乗るなりわれがちに着いた座

席にも、何となく馴じめず、ぼくたちはまったく落ち着かなかった。しかし、ぼくたちの目は輝々として、顔はおのずとほころんで見えた。みな思い思いの夢をふくらませていたのだろう。五分と乗らなかった電車がとても強い印象であった。

駅を出ると、誰とはなしに西の方へ歩いた。誰かトンネルへ行く道を知っていたのだろうか。いや、そんなはずはない。ぼくたちはみなまだ小さく、この隣の町へ来たのもそれほど多くはなかったはずである。その以前、学校の遠足で、盆地の東方に位置する天上敷き公園のある小高い山に登った時、ぼくたちは遠く西の方を眺めて深呼吸をしたことがあった。その折、担任の先生から話を聞きながら、ふるさとの盆地を一望に臨んだ思

い出は、その日のぼくたちの行動のもっとも重要な因であつたかもしれない。盆地の東西を二すじの川が悠々と南下し、それが東南のはずれで一つに合して、山並みを分断し南の平野へと流れている。盆地の東北から西北にかけては大きな山々が連なり、南からゆるやかに続く丘陵と西の方で繋がっている。この山の節目のところにおけるわしい隧道があり、小さなトンネルがあるということなのである。

一時間近くも歩いただろうか。途中、ぼくたちは道すがらの景色の一々を興味深く観察したり、行きかう人たちの誰にも好奇の目をやった。とりわけ、同じ年頃の悪童連に会うと、ちょっといたずらっぽくふるまい、ぼくたちは多少勇んでみせた。ぼくたちだけでこんなところに来たという妙な自信と余裕からであつた。

二、三の村落を通り過ぎて、日差しがそろそろ傾きはじめようとする頃、ぼくたちはトンネルに辿り着いた。古い石のトンネルで、入り口付近も湿気を帯びて苔むしていた。そしてトンネルの奥にぽっかりと白く輝く出口も見えた。ぼくたちはもう有頂天であつたが、逆にトンネルのこちら側は日差しが陰になり、いささか暗かつた。せいか、少しばかり不安でもあつた。

それでもぼくたちはトンネルの中へと入って行つた。ひんやりとした感触は、歩き通して汗ばんだ身体に快くしみ渡つた。なぜか、ぼくたちは口を開かなかつた。みな緊張していたのだろうか。

トンネルを抜けると、そこは別世界の輝きであつた。はじめて踏みしめたこの土地は、ぼくたちの住んでいる盆地とはまったく風情の違つたところであつた。夕日を真近に感じさせようとする日差しの最後の一燃えに、さんさんと照り輝いて山間の部落があつた。草ぶきの農家が三々五々に散り、山の畑と木々の青葉が穏やかに広がつていた。中天高く浮んだ白い大きな雲は、この部落のためにやさしくほほえんでいるかようであつた。

○

子供たちの行動や感情はまことに妙なものである。いつか月日が過ぎてふと思ひ出しみると、いやはや大いに苦笑する時もある。だが、二度と帰り来ぬ過ぎ来し方には、せつない胸の思が残る。ようやく大人の仲間に加えて頂いた今日、トンネルの彼方の別世界の輝きは果して色あせたとしても、トンネルまで行こうと決意した希望は決して棄てることはできない。

岡山県久米南町の法然上人誕生

地に建つ誕生寺へは何度も出かけるが、いつも法然上人のことについて新しい資料がみつかつてうれしく思う。

この間も誕生寺を訪ねたときに住職の漆間徳然さんが、わざわざ車で都原まで案内してくださった。

都原というのは、誕生寺から二

キロのところにある中央町表木というところである。小高い丘陵をまじえて民家がたちならんでいるが、この田圃のまんなか都原という地名のところなのであろう。

どうしてここを都原というのか、それは少年勢至丸が、父の死後その叔父の親覚のもとにあづけられていたのを、ついでこの久米南条稲岡庄の地をはなれて比叡に登って勉強するのであるが、その比叡山修行に出発してから、母は毎日この都原まできて、吾が子の無事を祈って、この地から比叡山のある方角を見ては涙したという場所である。

勢至丸の登山については、十三歳説、十五歳説とある。

十五歳説をつたえるものは、知恩請私記、四十八巻伝、古



道への叡仰

和高橋

徳伝、九巻伝、そして親鸞の浄土高僧和讃などにあり、十三歳説では、十巻伝、正源明義抄、知恩伝、弘願本、十六門記などである。これについて三田全信博士は十五歳説は、二祖の聖光相伝、西山派の証空の相伝、親鸞相伝に十五歳説が正しいと述べているが、本宗では今日まで、この十五歳説をもって登山の年としている。

この少年勢至丸が、比叡山に登ったあとは、全く母一人である。

田圃には春風が畦道の雑草をゆすっていた。

昔ならつくしを摘む子供や、蓬をとる田舎の老婆などがいるような風景のところである。

ここは先にも述べたように岡山県久米郡中央町表木というところである。その村のはしの、野道に、火ふくろだけ新しい最近のものであるが、台石も、その上の屋根石も古い石の灯籠が一基建てられている。

そしてその横にはま新しい石柱が一つ建っている。本当に新しい御影色である。その石の正面を見ると、仰叡の灯と彫

つてある。その中央に

かたみとてはかなき親のとどめてし、この別れさえまた

いかにせん

という歌が記され、そして一ばんはしに、「秦氏君の詠める」とある。

秦氏とは法然上人の母上である。

おそらくこの都原のこの地で、比叡の方向を仰いで涙ぐんだ母の姿を思いうかべてみるがよい。

このときの様子を四十八巻伝の「上洛懇請」のところからつづてみると、

はやく四明にのほりて、すみやかに一乗を学ぶべし、但し、母世につまさんほどは、晨昏の礼をいたし、水菽（すいしやく）の孝をつとむべしといへども、有為をいとひ無為にはなるは、真実の報恩なりといへり。一旦の別離をかなしみ、永日の悲嘆をのこし給ふ事なけれ、母堂ことほりおれて、承諾の詞をのぶといへども、袖にあまるかなしみの涙、小児のくろかみをくるほす。有為のならひしびがたく、浮生のわかれまどひやすく、かくぞおもひつゞけゝる。

かたみとてはかなきおやののとどめてし、この別れさ又いかにせん。

とある。

ここにある小児というのは幼少のころの勢至丸のことである。

比叡山に吾が子を送ったあとの母はその淋しさをこの仰觀のところで一人その子の無事を祈ったかと思うと、わたしの心をうつものがあつた。

何度も、何度もこの灯籠をなでながら、その母上の心もちを味わつてみたのである。

春の日はひときわさんさんとふりをそいで、微風が頬をなでるような日であつた。わたしの臉にはいつかしらあつい涙が浮かんできた。

そしてもう少し向う、ほんの五十米ほど先には、この母上と勢至丸が別れたというところもある。

小さな辻堂である。なかはがらんとしている。けれど手を振つて生れ故郷をあとにして京都に向う勢至丸のすがたを思い出してみた。

八百五十年前のことであるが、子を送る心は今日も同じである。

砂をかぶつて白くなつてゐるこの小さなお堂をなでて、そのころのようすを聞きたいような氣持になつた。

浄土宗の国宝

知恩院勢至堂

永い歴史のなかにつちかわれた古都は、どこかどっしりとした落ち着いた静寂さがある。四季を通じての京都は、我々に心の故郷の味を満喫させてくれる。新緑香る東山連峰を背に拡大な薨を列ねる知恩院、永い風雪に耐えてきた重みある歴史は四方の自然に調和し、なんともいえない風情を心に浸み透す。

ここに紹介する知恩院勢至堂は先に紹介した三門と、御影堂(大殿)、唐門、経蔵などと並び国宝に指定された重要建造物である。その中において当山建築物最古のもの、明治三十二年四月国宝建造物に指定さる。三門をくぐり長い石段を登りつめると前面に荘大な御影堂が目

をおう、勢至堂はこの東方、宗祖法然上人御廟の参道を上りつめた山腹の左側にひっそりと御影堂にかくれるように大谷浄室の旧地に位置している、別名を本地堂ともいう。七間七面、間数にして桁行八間半、梁間八間のほぼ正方形で単層入母屋造本瓦葺で南に面している。一五三〇年(永禄三)当寺二十七世徳普光然の再建である。もと御影堂であったが慶長年間、法然上人像を現在の御影堂に遷し、本地勢至菩薩像を壇上に安置したことにより名称がつく。

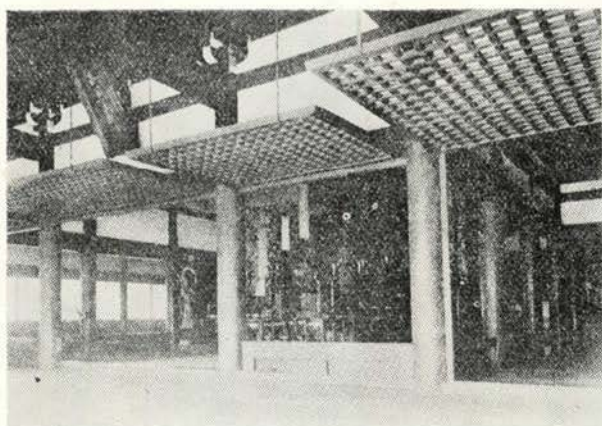
堂宇の南北西の三方は縁をめぐらし、擬宝珠勾欄を添え縁側に面して腰高明障子を立て正面中央は板唐戸両開となつてゐる。内陣の中央奥に須弥壇厨子を置き本尊勢至菩薩、後陣の東壇には阿弥陀仏、西壇には善導大師像を安置す。堂宇手法は後世修造の跡がみられるが、全体的に和様手法であるが内陣の鏡天井、須弥壇は唐様手法が用いられ一種の折衷様式からなり、室町中期の時代様式がうかがえる。往時より不断念仏が修されていたという。参拝客の多い混雑した大殿と異なり、静寂なたたずまいのなかにある勢至堂での不断念仏は、一入、心の安らぎを与えてくれるであらう。

(佐々木洋之)

知恩院勢至堂



同 内 部



「浄土」購読規定

一部 定価 百円
(送料十二円)

会費一カ年金一、二〇〇円
(送料 不要)

浄 土

六月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十八年五月二十五日 印刷
昭和四十八年六月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人鑽仰会
電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

大正大学助教授 宮 林 昭 彦 著

B6判 96頁 定価 160円 （千70円）

（200部以上 単価 140円 送料実費）

内 容

第 一 編 法然上人のあゆみ

1. 法然上人の時代と出家
2. 求道生活
3. 専修念仏の確信
4. 新しい救済
5. 晩年の法然上人

第 二 編 浄土宗のおしえ

1. 浄土宗を開かれたわけ
2. 末法と人間
3. 万人平等の救い
4. 選択のおしえ
5. 浄土三部経
6. 阿弥陀仏と浄土
7. 浄土宗の真髄

第 三 編 信徒の心得

1. 浄土宗の年中行事
2. 仏事の手びき

法然上人略年譜・附参考文献

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。お申込みはお早目をお願いいたします。